

## 日本信頼性学会・論文スタイル出力のための

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X マクロ

石岡 恒憲\*

A L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X style macro for the journal of Reliability Engineering

Association of Japan

Tsunenori ISHIOKA

**要旨:** 標記スタイル・ファイル `reajmac.sty` を試作した．可能な限り `[j]article.sty` のコマンドをそのままの形で利用できるようにした．

**キーワード:** style file, Reliability Engineering Association of Japan, L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X

**Abstract:** This paper presents ‘reajmac.sty’ of a L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X style file and its usage. Commands in `[j]article.sty` can be available as much as possible.

**Keywords:** style file, Reliability Engineering Association of Japan, L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X

## 1 はじめに

Knuth[1] によって開発された T<sub>E</sub>X システム，およびそれをマクロ化した L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X システム [2] は，科学技術の分野では，現在，もっとも広く用いられている文書処理システムであるといつてよいであろう．日本信頼性学会でも，多くの論文が L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X システムを用いて作成されているようである．著者は，本学会の研究論文の執筆要項に準拠するための L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のスタイル・ファイル `reajmac.sty` を試作したので，報告する．`reajmac.sty` 中に記述されている記入例にしたがって文書を作成したのち L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X で処理すれば，自動的に本論文誌のスタイルに整形される．

なお，本原稿自体がこのスタイル・ファイルを使用して作成されている．

## 2 使い方

### 2.1 環境設定

スタイル・ファイルの格納場所

本スタイル・ファイル `reajmac.sty` を環境変数 `TEX-INPUTS` で指定されているパスの中から適当と思われるディレクトリに置く．もしこの環境変数が指定され

ていない場合は，L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X をインストールする際に指定したパスの中から適当と思われるディレクトリに置くことよい．もっとも安直には，L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X で処理するカレント・ディレクトリに置いて実行可能であるが，データ共用という立場から推奨しない．

### 漢字コード

本スタイル・ファイルの漢字コードは `sjis` である．もし，使われている L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X の処理系，および動作環境が別の漢字コードを想定しているならば，適当なコード変換が必要となる．たとえば `eucl` に変換するなら，このファイルを `afile` という名でセーブし，

```
% nkf -a afile > jjasmac.sty
```

とする．

もっとも，電子メールを介することによって，本スタイル・ファイルの入手時に既に (`sjis` ではない) 別の漢字コードになっているかもしれない．この場合も適当なコード変換が必要となる．

なお，機種によっては `\` の代わりに `¥` (半角) を使う．これは表示が異なってみえるだけで，どちらもオクタ (8 進表示) で 134 の文字コードを示している．

\* 独立行政法人 大学入試センター 研究開発部 〒 153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23 Phone: 03-3468-3311 tunenori@rd.dnc.ac.jp

## 2.2 本スタイル・ファイル固有のコマンド

reajmac.sty の利用に際しては以下の点に留意すること:

- `\documentstyle` にて `reajmac.sty` をインクルードする。さらに 10 ポイントの指定, および 2 段組みの指定が必要である。

例: `\documentstyle[twocolumn,  
10pt,reajmac]{jarticle}`

latex2e ユーザなら, 以下のようにする。

例: `\documentstyle[twocolumn,  
10pt]{jarticle}`  
`\usepackage{reajmac}`

- 日本語題名 `\jtitle` と日本語著者名 `\jauthor` をそれぞれプリ・アンプルにて指定する。

複数著者がいる場合は `\jauthor` 中で `\and` を利用することができる。

例: `\jtitle{日本信頼性学会・論文スタイル出力のための\LaTeX{} マクロ}`  
`\jauthor{石岡恒憲\thanks{大学入試センター}`  
`\and 鎌倉稔成\thanks{中央大学 理工学部}}`

- 所属は `\jauthor` 中で `\thanks` として書く。第一著者名の右肩にアスタリスク (\*) がつき, 第二著者名の右肩にはアスタリスク 2 個 (\*\*) がつく。第三著者以降はアスタリスクと数字 (たとえば \*3) が付く (この部分は  $\LaTeX$  の仕様を変更してある。)

- 英語題名 `\title` と英語著者名 `\author` についても, 日本語の場合と同様にプリ・アンプルにて指定する。

- 日本語アブストラクトは, `\jabstract{}` の波括弧の中に書く。英文アブストラクトも `\abstract{}` の波括弧の中に書く。プリ・アンプルにて指定する。

- 日本語キーワードは, `\jkeywords{}` の波括弧の中に書く。英語キーワードも `\keywords{}` の波括弧の中に書く。プリ・アンプルにて指定する。

- 謝辞には特にマクロを定義していない。`\section*{謝辞}`にて節番号のない見出しを付け, 必要に応じて書く。

## 2.3 tips

$\LaTeX$  では, 特にパラグラフの最初の行において, オーバーフルを起こして右揃えできない場合がある。日本信頼性学会では 2 段組であるためにこの現象が起こりやすい。このような場合, 右揃えできないパラグラフ全体を `\begin{sloppypar}` と `\end{sloppypar}` で囲むと, 解決できることが多い。

## 2.4 スタイル・ファイルの入手

本スタイル・ファイル `reajmac.sty` は, 日本信頼性学会のホームページ <http://reaj.i-juse.co.jp/> から入手できる。

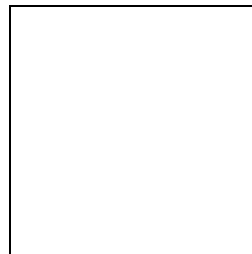
## 3 おわりに

本学会の執筆要項は  $\LaTeX$  標準のスタイルにかなり近い。このため,  $\LaTeX$  原稿にそのまま制御コマンドを入れてもたいした手間ではないが, スタイル・ファイルが用意されていれば, より便利なことは確かであろう。さらに修正を加えたい方には [3] などが参考になるであろう。

## 参考文献

- [1] Knuth, D. E., *The  $T_{E}X$  Book*, Addison-Wesley Publishing Company (1984).
- [2] Lamport, L.,  *$\LaTeX$ , A Document Preparation System*, Addison-Wesley Publishing Company (1986). [Cooke・倉沢 監訳, 大野・小暮・藤浦 訳: 「文書処理システム  $\LaTeX$ 」, アスキー出版局 (1990)]
- [3] 岩瀬 哲夫, 古川徹生,  $\LaTeX$  のマクロやスタイル・ファイルの利用, Version 2.10, (1993). Available online: [ftp://ftp.tohoku.ac.jp/pub/tex/latex-styles/bear\\_collections/styleuse.\\*](ftp://ftp.tohoku.ac.jp/pub/tex/latex-styles/bear_collections/styleuse.*)

(いしおか つねのり)



石岡 恒憲

1985年東京理科大学大学院修士課程工学研究科経営工学専攻修了。同年株式会社リコー(ソフトウェア研究所)入社。1998年文部省 大学入試センター研究開発部助教授。組織改編に伴い現在 独立行政法人大学入試センター准教授。統計学, 信頼性工学, 情報数理に関する研究に従事。工学博士。日本信頼性学会(論文審査委員), 応用統計学会(編集委員), 言語処理学会, ACL 各会員。Marquis Who's Who in the World, 2008/2009; Science and Engineering, 2006-2007/2008-2009; in America 2009.